

「もの」複合形容詞の意義

— 源氏物語の用例を中心として —

東 辻 保 和

- 1 はじめに
- 2 類似の場面に見られる、「もの」複合形容詞と単純形容詞の、意義の類似性
- 3 諸本間に見られる、両形容詞の対応
- 4 「もの」複合形容詞に内在する問題点
- 5 むすび

この論文では、「もの」を前部要素とする複合形容詞のラングの意味——これを、以後、「意義」と称する——について「源氏物語」を主たる資料として、述べることにする。なお、「もの」を前部要素とする複合形容詞の認定については、^(注1)論証を済ませた。又、「ものあはれなり」の類の形容動詞をも含めて、便宜、「もの」複合形容詞と呼ぶことにする。

「もの」複合形容詞の意義は、従来、「大言海」をはじめ、「明解古語辞典」(新版)に至るまで、各辞典ともに、^(注2)「ナントナク——」と説明されており、北山谿太氏の「源氏物語辞典」に於ても、それは踏襲されている。これについて、わたしは、^(注3)旧稿で、些かの疑義を表明しておいた。今回は、わたしは疑義を抱く第二の原

因となつた資料を、次に加えようと思う。

あまたのとし比このみちをゆきかふたひかさなるをおもふにそこ

はかとなく物あはれなるかな ^(注5) (東屋一八四八①)

いとかりそめに思給へるけしきにる物なく心くるしくすゝろに ^(注6) (御法一三八九①)

ものかなし ^(注7) (紅梅一四五一⑥)

てひさしう成はへりにけり ^(注8) (若菜下一二二五⑤)

つこもりの日は人々あまたまいり給へりなま物うくすゝろはしけれと ^(注9) (若菜下一二二五⑤)

これらの例文では、^(注10)「ナントナク」に相当する語としては、「そこはかとなく」「すゝろに」「なにとなく」「なま」などが用いられている。さすれば、「もの」複合形容詞の意義を、^(注11)「ナントナク——」と説明することは、同概念が重複することとなり、不自然ではないのか、と疑われてくるわけである。そこで、以下、詳細に、「もの」複合形容詞の意義に、検討を加えて行くこととする。^(注12)

2.

次に、「甲」(乙)十二対の例文により、「もの」複合形容詞と、形態的

には「もの」複合形容詞の後部要素と等しい形容詞—以後、單純形容詞と称する—との、意義の比較を行なう。

なお、次の事が前提となつてゐる。

①「もの」複合形容詞と單純形容詞とは、會話文（意想文をも含む）、地の文共に用いられている。

②兩者には、位相による顯著な差異が認められない。

(1)

〔甲〕夜もいたうふけゆくに風のけはひはけしくてまことにいともの心ほそくおほゆれは（朝顔六五〇）

〔乙〕風いとふ吹て雪のふるさまあはたしうあれまよふみやこにはいとかうしもあらしかしと人やりならず心ほそつてうとくてやみぬべきにやとおもふ契はつらけれと（総角一六五八）

〔甲〕は源氏の心を、〔乙〕は、薫の心を説明する、いずれも地の文である。酷似した自然環境が誘発する心情である。そのみならず、〔甲〕では、朝顔が源氏の永年の恋を受け入れようとはしないので、源氏は朝顔の邸で、失恋の嘆きに沈んでいる、という場面が潜在する。

〔乙〕では、薫が、大君の平癒祈願のために、宇治に滞在している。しかも、大君の病氣は篤く、薫は、大君とは夫婦になれずに終るのかという嘆きの中にある。このように、〔甲〕〔乙〕共に、愛人を得ることが出来ないのを嘆くという、共通した場面が潜在している。その上に、自然の無情が付加されて起る心情なのである。

(2)

〔甲〕のこりすくなきよはひとまたに今はそむきはへる時はいと物心ほそくおほえ侍し物を世をこめたるさかりにてはつるにいかうと

なんみ給へ侍（手習二〇一四）

〔乙〕よのおもしともしの給へるおとよのかく世をのかれ給へはおほやけも心ほそくおほされ世の人も心あるかきりはなけきけり（賢木三七一）

〔甲〕は、「横川の僧都の妹の尼君とその娘婿の中將」の會話、〔乙〕は、地の文である。〔甲〕は、尼君が、將來のある若盛りの浮舟が出家することについての、不安を語る場面であり、〔乙〕は、政界の重鎮たる左大臣が辞任することを、朱雀院が不安に思われることを説明する。いずれも、將來に期待の懸けられる人物が、世を捨てることへの、第三者の不安を表わしているのである。

(3)

〔甲〕世中はしたなくおほされてこもりおはす左のおとよもおほやけわたくしひきかへたる世のありさまにもうくおほして致仕のへうたてまつり給を（賢木三七一）

〔乙〕大将殿はかなしきことにことをそへて世の中をいとうき物に「おほししみぬれは（葵三〇四）

〔甲〕は、桐壺院の死後、万事につけて、左大臣方の政治勢力が、右大臣のそれに比べて劣るようになる世を、左大臣が嘆くことの説明である。

〔乙〕は、源氏が、葵の死のみならず、六条御息所が生霊になつたという二重の不幸を嘆いていることの説明であつて、いずれも、宿命的な「世」「世の中」を嘆く心情の説明になつていたのである。

ところで、「世」を対象とする感情が、いかなる語で表現されているか、について、特に、「憂し」と入るの憂しVとに關して、調

査したところによると、次の通りである。（「源氏物語」全巻調査）

(1) 八もの憂しVで表わされた例 四

(2) 「憂し」で表わされた例 五十一

これは、かなり大きい偏差である。「憂し」の例の中には、十七例の短歌が含まれているので、この分については、或は、音数上の制約から、八もの憂しVを採らなかつたのかも知れない。しかしながら、仮にその分を除いても、両者の差は依然として大きい。當時は、「世」についての感情は、八もの憂しVよりは、「憂し」で表現される傾向があつたと見るべきなのかも知れない、参考までに、二、三他の作品によって検討すると、次の通りであり、「源氏物語」の場合と同様（度数は少ないが）の傾向が見られる。

「伊勢物語」(1)なし。(2)内、歌二

「蜻蛉日記」(1)なし。(2)五（全部歌）

「和泉式部日記」(1)なし。(2)一（歌の部分引用）

「紫式部日記」(1)なし。(2)三

「更級日記」(1)なし。(2)三（内、歌二）

(4)

〔甲〕世のはかなさをめにちかくみしにいと心うく身もゆゆしく

おほゆれはいかにもいかにもさやうのありさまは物うくなん（早

麻一六九一⑩）

〔乙〕人の御うへにても物をいみしく思しつみ給ていとよかゝるか

たをうきものに思はてよ（総角一六三三③）

〔甲〕は、「薫↓仲人」の会話文、〔乙〕は、大君の意中の説明である。「甲」の「さやうのありさま」、〔乙〕の「かゝるかた」は、共に、結婚のことである。「甲」では、大君の死によって、世

の無常をまざまざと目撃した薫が、大君との結婚話に乗り気でないことを表わしており、「乙」では、大君が、妹中君と匂宮との関係を見るにつけても、結婚の事を一入いやなことだと思ふことを述べている。即ち、両者共に、人の世のはかなさを痛感する事件の経験を契機として、結婚に嫌悪の情を抱いている点においては、同質だと言えよう。

(5)

〔甲〕身のみものうきほとに（賢木三六四②）出典「数ならぬ身のみものうく思ほえて待たるるまでになりにけるかな」（後撰集）

〔乙〕かけをのみみたらし河のつれなきに身のうきはとそいとしらるゝ（葵二八八②）

いとふかうにくみ給へかめれば身もうくおもひはてぬ（空蟬九三⑩）

わが身を対象とする感情が〔甲〕では、八もの憂しVと表現され、〔乙〕では、「憂し」と表現される。

一体、「身」を対象とする感情は、いかなる語で表現されているかについて、特に、「憂し」と八もの憂しVとに關して、調査したところによれば、次の通りである。（「源氏物語」全巻調査）

(1) 八もの憂しVで表現された例 一

(2) 「憂し」で表現された例 三十二

上述の「世」の場合と同様に、両者には、著しい偏差が認められる。しかも、(1)の一例は、後撰集巻四の歌の部分引用と考えられるものであるから、「源氏物語」に關する限り、八もの憂しVで表現された例は、零だということになる。また(2)を検討すると、内十例は和歌である。これらには音数上の制約もあつたことかも知れ

ない。また、(四)の三十二例の内、「憂き身」となった例は、十七例を算える。これは、一面、「憂き身」と「身」との、結合の緊密度を示すものと言えよう。一種のイデオム化していたものかとも考えられる。参考までに、他の作品の場合を掲げておく。

「伊勢物語」(イ)なし。(ロ)なし。

「蜻蛉日記」(イ)なし。(ロ)入(内、歌四)

「和泉式部日記」(イ)なし。(ロ)なし。

「紫式部日記」(イ)なし。(ロ)一

「更級日記」(イ)なし。(ロ)なし。

(6) 「甲」なを雨風やます神なりしつまらて日ころになりぬいと、物わひしき事かすしらすきしかた行さきかなしき御ありさまに心つようしもおほしなさず(明石四四一①)

「乙」風のをともあらゝかに例みぬ人かけもうちつれこはつくればまつむねつふれて物おそろしくわひしうおほゆることさへそひにたるかひみしうたへかたきこと(権本一五七一⑤)

「甲」は地の文。人物わひしきは、源氏の心中の説明である。

「乙」は、宇治入宮の姫達の会話文である。源氏は、身を退いて、須磨に蟄居する。宇治入宮の姫達は、父宮と死別する。共に、境遇の思いがけぬ急変に遭遇した人間が、類似の自然環境に対して拘く感情の表現である。

(7) 「甲」右のおとゝの北の方のとりたてたるうしろのみもなくおさなくよりものはかなき世にさすらふるやうにておいて給けれと(若菜下一二〇三⑥)

「乙」とたえをき侍しほとにあともなくこそかきけちてうせにしかまた世にあらははかなきよにそさすららん(帚木五七七⑧)

「甲」は、源氏が玉變の生い立ちを回想する理想文。「乙」は、「頭中将・源氏」の、夕顔を追憶しての会話文である。この二例文では、殊に、「甲」「世にさすらふるやうにて」と、「乙」「よにそさすららん」というように、同じ言語素材を用い、その言語素材間の格関係も等しいにも拘らず、「世」への修飾語は、「甲」は人ものはかなきでであり、「乙」は「はかなき」である。

(8) 「甲」いさやそのゆへもいかなりけん事とも思ひわかれ侍らすもはかなきありさまもにてよにおちとまりさすらへんとすらむことのみうしろめたけにおほしたりし事ともをたゝひとりかきあつめて思ひしられ侍に又あいなきことをさへうちそへて人もききたへんこそいといとおしかるへけれ(宿木一七五五⑩)

「乙」としころいつくになむおはするなとありのままにもしらせざりければはかなきさまにておはすらむと思ひひけるを京になとむかへ給てのちめいほくありてなとしらせむとおもひけるほとに(蜻蛉一九六〇⑨)

「甲」は、「中君・薫」の会話文。「乙」は地の文であるが、傍線部は、常陸介の理想文である。「甲」では、宇治入宮が、姫達の生活を、また「乙」では、常陸介が浮舟の生活を心配していることが述べられている。両傍線部の言語素材には、相違はあるが、それとても量的な相違であって、質的な相違というべきではなく、また、「(もの)はかなきサマニテアルラン」という、論理的内容に於ては、等しいと言い得るであろう。

(9)

〔甲〕こしうと弁とはなちてまたしる人侍らしひとにててもまたことひとにうちまねひ侍らすかくものはかなくかすならぬ身のほとに侍れとよるひるかの御かけにつきたてまつりて侍しかはをのつからものゝけしきをもみたてまつりそめしに(橋姫一五三八)

⑥

〔乙〕我身はかくはかなきさまにていつ方にもふかく思とゝめられたてまつれるほともなく(藤袴九一九④)

〔甲〕は、「弁↓蕉」の会話文。〔乙〕は、玉鬘の意想文である。「対校源氏物語新釈」によれば、「甲」の人もはかなくVには、「頼りない」という訳が施され、「乙」の「はかなきさまにて」には、「身分も賤しく田舎で生長した事をいふ」と説明されている。いずれにしても、ある標準に照らして、自分は、人並でない、という謙遜・自卑の心から発せられたことばであることには相違なく、その意味に於て、質的には等しいと考えられるのではあるまいか。

(10)

〔甲〕まことやわれながら心よりほかなる麴さきことにてうとまられたてまつりしふしを思出さへむねいたきに又あやしうものはかなき夢をこそみ侍りしか(明石四六六⑩)

〔乙〕涙をえせきとめすこの御ゆめかたりをかつは行くさきたのもしくさはひか心にて我身をさしもあるましきさまにあくからし給となかこる思たゝよはれしことはかくはかなき夢にたのみをかけた心たかくものし給なりけりとかつかつ思あはせ給(若菜上一〇)

九八⑨

〔甲〕は、「源氏↓紫上」の消息文。〔乙〕は、明石上の意想文である。〔甲〕〔乙〕共に、傍線部は、「夢」に係る連体修飾語である。〔甲〕では、源氏が、明石上と会ったことをAものはかなき夢Vといい、〔乙〕では、曾て、明石入道が、みずから須弥山を右の手に擡げ、山の左右から、月日の光がさし出て世を照らすという夢を見たという。その夢をAはかなき夢Vといったのである。

〔夢〕とは言い条、単に「夢」として忘れ去ることが出来たのではない。〔甲〕で、源氏は、紫上に、懺悔し、隔意のないことを誓ってはいるものの、明石上は、遂に源氏の忘れ得ぬ女性となったのであり、〔乙〕では、明石入道は、その「夢」を頼みにして、娘を源氏に娶せたのである。いずれも、忘れ得ぬ「夢」であったわけである。

(11)

〔甲〕大将もいと物むつかしうたちそひきはき給まで

〔乙〕えおはしましはなれすかういときひしきちかきまもりこそむつかしけれとにくませ給(真木柱九六一⑩)

〔甲〕〔乙〕は、一連の文である。〔甲〕は地の文、〔乙〕は、冷泉院の会話文である。冷泉院が、玉鬘に並々ならず心を寄せられるのを見た鬚黒大将は、玉鬘の側に来て、やかましく退出をせき立てる場面である。その大将の態度を、冷泉院は、「むつかし」と表現し、地の文では、AものむつかしVと表現する。この方は、〔乙〕に比べて、感情の主体が必ずしも明確ではなく、「乙」よりも、客観化の傾向が見られはするが、仮に、AものむつかしVと「むつかし」を入れ替えても、その間に、明確な意義差は認め難いようである。

(12)

「甲」をもくわつらひたる人はをのつからかみひけもみたれものむつかしきはひもそふわさなるをやせさらほひたるしもいよいよしろうあてなるさましてまくらをそはたてゝものなときこえ給けはひ(柏木一二四五⑧)

「乙」かく久しうわつらふ人はむつかしきことをのつからあるへきをいささかおとろへすいときよけにねちけたる所なくのみ物し給(手習一九九八⑬)

「甲」は地の文、「乙」は、「妹尼↓横川僧都」の会話文である。「甲」は、柏木の姿を、「乙」は、浮舟の姿を述べた場面である。いずれも病氣に罹りながら、いさゝかも、むさいところの無いことを説明する。

他の例は、紙幅の都合で省略する。なお、引用例が偏っているのは、資料の制約によるものである。

以上は、それぞれ説明したごとく、「甲」「乙」互に類似の場面において、一は「もの」複合形容詞、他は単純形容詞が用いられた例である。これらの使用例から考えてみると、両者が、その意義において、甚だ類似していることが認められようかと思う。

次に一段と酷似した例に進む。

(13)

「甲」やよひになれはそらのけしきものうらゝかにてこの君いかのほとになり給て(柏木一二四九⑧)

「乙」三月の十日なれば花さかりにて空のけしきなともうらゝかにものおもしろく仏のおはする所のありさまとをからすおもひやられてことなり(御法一三八三⑨)

ここでは、「甲」「乙」双方の自然的条件は、全く同じだと見てもよからう。

(14)

宮の内侍ぞ、またいときよげなる人。たけだちいとよきほどなるが、ふたるさま、姿つき、いともものしくいまめいたるやうだいにて、こまかに、とりたててをかしげとも見えぬものから、いともきよげにうひうひしく、なか高き顔して、色のあはひ白きなど、人にすぐれたり。(紫式部日記・古典大系)

宮の内侍の状態を説明して、前には「きよげなり」と言い、後には八ものきよげなりVという。

(15)

「甲」かくて今年は女院の御四十の賀、(中略)七月にと思し召しけれど、世の中物騒がしう思されて、過ぐさせ給ふに(「榮花物語」鳥辺野・古典全書)

「乙」今年は大方向いと騒がしう、いつぞやの心地して道大路のいみじきに(全右)

「甲」「乙」共に、疫病が流行して、世間は、所謂、物情騒然としていたことを表わすのである。

3

本研究の底本とした「源氏物語大成校異篇」本文、即ち、定家本・大島本と、河内本及び別本との間には、次表のごとき対応が見られる。

齋宮の御くたりちかう成ゆくまゝに

御息所ものころほそくおもほす(賢木三三三①)

風のけはひはけしくてまことにいともの心ほそくおほゆれば

(朝顔六五〇②)

けふよりのち日ついてあしかりけりなと人きゝにはの給いていと

もかなしうあはれに(夕霧一三四〇③)

そこはかとなくつれつれに心ほそうのみおほゆるを(未摘花二〇

九④)

右近をおこし給これもおそろしと思たるさまにてまわりよれり

(夕顔二二二⑤)

とし月にそへて宮のうちさびしくのみなりまさる(橋姫一五〇九

④)

いかにおきなき人おそろしからむとみゆ(若紫一八〇⑥)

いぬとものいてきてのゝしるもいとおそろしく(浮舟一九二⑦)

いといたうあれわたりてさびしき所に(未摘花二〇三⑧)

おほかたの人からまめやかに(少女六七三①)

夢をおほしてゝいとものなけかしうなかも給ふ(花宴二七六

③)

さうしみはかくうたであるものなけかしきの後は(螢八〇六⑨)

御息所は心ほそく

いと心ほそく

いとものかなしう

もの心ほそく(別本)

物おそろしと思たる

物さびしく

ものおそろしからむとみえたり

物おそろしく

ものをそろしく(別本)

ものさびしき

物さびしき(別本)

物まめやかに

夢のち物いとなけかしくてなかもをのみし給

うたであることなけかしき

さまざまにおもほしみたれ人しれず物なげかし（藤袴九一七⑧）
時雨うちして物あはれなる暮つかた（葵三〇九⑩）
院かくれさせたまひてのちよいよあはれなる御ありさまを

（花散里三八七④）

この殿には物あはれになかめ給（竹河一五〇〇⑧）

おほときてしとけなき御心にも（宿木一七二〇②）

そらのけしきもゝのうららかにて（柏木一二四九⑨）

いと物さはかしければ色色のみてくら（明石四四三①①）

よしあしきけちめけさやかにもてはやし（常夏八三一⑦）

諸本間の異同が生ずる原因については、軽々に言うことを許されない。しかし、その原因の一つとして、次のように考えることは、許されないものであろうか。即ち、右のように対応が一、二の例にとどまらないということは、「もの」複合形容詞と單純形容詞との意義上の近接・類似が原因となつて、原源氏の語形がいずれであつたにせよ、その筆写の過程において、混同される条件にあつたのではないかと、想像されるのである。

4

次には、主として、「もの」複合形容詞に内在する問題点を取り上げて考察する。

(1) Λ ものかなし \vee 「かなし」に、 Λ 悲シ \vee と Λ 愛シ \vee とのあることは、周知のところである。源氏物語には、 Λ ものかなし・ものかなしげなり・ものかなしき \vee が計十七例ある。（「源氏物語大成」索引による。）それらは、すべて、 Λ 悲シ \vee の義に用いられてお

なげかし

あはれなる

かくれたまひてのちはいとゝものあはれなる

あはれに

物しとけなき（別本）

うららかにて

さはかしければ

ものけさやかにもてなし

り、 Λ 愛シ \vee の例は一つもない。この傾向は、「源氏物語」に限らず、中古かな文学作品に共通するものようである。

(2) Λ ものくるほ（は）し \vee Λ ものくるほ（は）し \vee の存在は、当然「くるほ（は）し」の存在を予想させるものではあるが、これも、中古かな文学作品では、すべて Λ ものくるほ（は）し \vee であつて、「くるほ（は）し」は、見当らないようである。たゞし、「承暦三年鈔本金光明最勝王経普養」には、「狂久留保之」とある。これは、漢文訓読語には用いられたことを表わすものと考えられる。

(3) 「もの」に、陽性的情意を表わす形容詞の結合した複合形容詞は、管見の限りでは、「落窪物語」「宇津保物語」「蜻蛉日記」に初めて見出すことが出来る。（注）これら諸作品の成立年代については、諸説あり、必ずしも定かでないが、いずれも、大体十世紀の中期から後期の頃の成立と考えられている。）

此の三位の中將、交らひのほどなどに心みるに、物たのもしげあ

りて(「落窪」卷三・古典大系)

いかなるにか待らむ、人のやうに物ゆかしともし待らざめり(「落窪」卷二)

いと人わらへにはなりはて給ふらんなど、物ほこりにかにいひのしるほどに(「蜻蛉」卷中・古典大系)

大持いとものゆかしし給めり。ゆめみせたまふな(「宇津保」国譲上・古典文庫)

精々この程度の例しか見当たらない。やがて「源氏物語」に至ると、次のように多形になる。(例文の引用は省略する。)

△ものうあうみし▽(玉鬘)・△ものこのまし▽(総角)・△ものをかし▽(常夏)・△ものほこりかなり▽(宿木)・△ものおもしろし▽(御法)・△ものうららかなり▽(柏木)・△ものさはやかなり▽(御幸)

他方、陰性的情意を表わす語と複合した「もの」複合形容詞は、既に、「竹取物語」に△ものうし▽一、「伊勢物語」に△もの心ぼそし・ものわびし・ものうたがはし・ものかなし▽各一例、「大和物語」に△もの心ぼそし▽一が見出される。その他、漢文訓読語系統では、「石山寺本蘇悉地羯羅經略疏天厝点」(大坪伴治氏「訓点語の研究」による)、前掲「最勝王経音義」、「新撰字鏡」、「類聚名義抄」(観智院本)に、△モノウシ▽が見られる。

△今一つ考え合はずべきものに、「ものを思ふ」という表現における、「もの」の意義がある。これについては、既に論じたところであるが、要するに、「ものを思ふ」の「もの」は、例えば、人の死とか、孤独感の原因となる事情とか、或は、満たされない恋とかのように、すべて否定的内容を表わす。従って、陰性的情感を伴う

のを常とする。そして、「もの」は、本来、自己の力を以てしては、どうにもならない、運命的な世界を表わす語であったのではないか、と思われ、そのような世界を志向する感情は、勢い、陰性的傾向を帯びざるを得ないのではないか、と想像せられるのである。

以上、この章で述べたところから推測するに、発生の当初において、「もの」が、情意性形容詞と結合する場合には、陰性的情意を表わす形容詞と結合して、陽性的情意を表わす形容詞とは、結合し得なかつたのではないか、と考えられるのである。

5

「もの」複合形容詞と単純形容詞との意義には、明確な差違を見出すことが出来ない。わたしは、次のような仮説を立てる。

発生的には「もの」は、鬼とか靈とか、陰性的情意を誘発する対象を表わす語であつたであろうが、「もの」の概念が拡大されるに従つて、「もの」は、陰性的情意の対象として意識されること、次第に弱くなつて行つたのであろう。本来、二語の連接であつたと考えられる、「もの」+陰性的情意を表わす形容詞が、複合化したのは、その段階においてではないかと想像せられるのである。これを別の観点から見れば、陰性的情意を表わす形容詞そのものが、元来、「もの」によつて表わされるところの対象を対象とする、情意を表わす語であるために、「もの」が、陰性的情意を表わす形容詞に包含されてしまつた、と見ることが出来るのではあるまいか。

こうして、「もの」複合形容詞は、単純形容詞の持たない特有の内容、即ち、「運命的な暗さ」——たとえば、△ドウニモナラナイ淋シサ▽とか、△覆イカブサツテクルヨウナ悲シサ▽とか——を籠めた語になつて行つたのであろう、と推測される。ただ、当然、この

特有の意義が、時間的に変化することが予想される。わたしは、前章で述べたところから、中古の比較的早い時期において、その特有の意義は、次第に稀薄になって行ったのではないかと想像している。ただ、資料が不十分であるから、陽性的「もの」複合形容詞の成立した上限を、明らかにすることは、現在のところ困難であるが。

なお、客観的屬性を表わす形容詞と、「もの」とが連接した連語があるが、目下のところ、それらは、原則として、二語と考えるのがよいと思っている。旧稿^(注9)で述べた通りである。

(注)

1 「論究日本文学」(二十二号)所収拙稿。

2 「論究日本文学」(十九号)所収拙稿。

3 数字は、「源氏物語大成校異篇」のページ数と行数を示す。

4 この論文は、語彙論の基礎的研究であって、いわゆる解釈論を志向するものではないことを、付言しておく。

5 これについて、清水文雄先生から、八ものうし^しの「もの」に、「世」が含まれているからではないか、とのお教えをいただいた。なお、「もの」と「世」との概念上の関係については、西下経一博士に、次のご論文があり、「もの」は「世」の上位概念であるとされた。(『源氏物語の「世」と「物」』——「文学・語学」第六号)

6 「万葉集」に八モノコヒシ^しが二例ある。しかし、複合形容詞と認定するには疑問があるので、除外した。また、注2の拙稿では、「こひし」を、一応、陽性的情意を表わす形容詞として分類したが、なお疑問を残している。

7 「万葉集」に八モノカナシ^しが二例ある。注6と同じ理由により、除外した。

8 「国語教育研究」(八号)所収拙稿。

9 注2と同じ

(付)

本論は、六月二十日の広島大学文学部有文会研究発表会で発表し、ものに、修訂を施したものである。